

あなたを離さない

[詩編 23 編 1～6 節]

【賛歌。ダビデの詩。】

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い

魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく

わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。

わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢れさせてくださる。

命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう。

[1] 聖書の中の「宝石」

全部で 66 の書物から成っている旧約聖書・新約聖書の中でも、特に宝石のように輝くみ言葉があると思います。この言葉が聖書にあることは何と有難いことか、幸いなことかと思えるみ言葉の数々があると思います。

恐らく新約聖書の中ではヨハネによる福音書の 3 章 16 節の言葉は、たった一節ですけれども、その光の光度はずば抜けていると思います。「福音とはこれだ」とたった 1 節で言い切っています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

旧約聖書の方ではどうでしょうか。私は今日の詩編 23 編が、旧約最大の宝石だと言っても良いのではないかと考えています。「詩編」には他にも宝のような言葉（詩編）が沢山ありますけれども、世界中の多くの人に愛されている点において、また、とても短いですが、多くの人々を本当に支え、生かしてきたという点において、これ以上の詩編は無いのではないかと考えています。

[2] 「あなたがわたしと共にいてくださる」

さて、この詩編ですが、「賛歌。ダビデの詩」となっています。イスラエルの王となったダビデ自身が詠んだ詩と捉えることも出来るし、もっと後の時代の信仰者がダビデの名を借りて詠んだもの、と考えることも出来るようです。

ただ、特徴的なことは、ダビデであろうがそうではなかろうが、この詩には、その人の社会的地位（王）とか人間的な自慢とか、そのようなものは一切ないということです。この詩人は、ただ「私」という個人と、主なる神様との関係だけを喜び、歌っているということ、それは大事なことではないかと思います。だからこそ、この詩編は、この私の、また、私たちの詩編になっていると思うのです。

今から三年前に召された小山京子さんもこの詩編を本当に愛していらっしやったとお聞きしました。ご主人の小山禎さんも、意識も薄れているような京子さんのためにこの詩編を何度も読んで差し上げていたそうです。召された後、この教会に京子さんが運ばれた際も、禎さんは京子さんに詩編 23 編を一緒に読みたいと言われ、そこで、私たちも一緒に読んだ記憶があります。その時の印象も残っていたと思います、実は私の実の母が今年 3 月に召された時のことですが、私と妻とはその前日の夕方から施設に呼ばれたのですが、母は酸素は吸入していたのですけれども、時折かなり苦しそうな息づかいになっていた時もあったのです。その中で、この詩編を中心にしていくつかの聖書の言葉を、母に聞いてほしいと思い、読んだことを思い起こします。その時は反応らしい反応は殆ど無かったのですが、それから少し時間が経ち、日付が変わる頃になると、苦しそうな様子が全くなくなっていました。苦しい表情はそこには無く、穏やかに眠っているようでした。きっと小山京子さんもそうだったのだと思います。

この詩編の中にこういう一節がありますね。

「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。」(23:4)

正に死に直面するような現場にあって恐れがないというのは、信仰者のきれいな事のように聞こえるでしょうか。確かに、もし自分の信仰（心）の強さを強調するのであれば、それは“きれいな事”になるかも知れません。しかし、全てが失われるような、消えていくような局面にあって、一体きれいな事に何の意味があるのでしょうか？—ないと思います。「私は災いを恐れない」。その次が極めて大事です。「あなたがわたしと共にいてくださる」。分量的にも丁度この詩編の真ん中辺りにあるこの言葉がこの詩編 23 編の大黒柱と言っているのではないかと思います。

どんなに親しい人間でも入ってゆけない試練があります。しかしその只中にあっても神が私を離さないのだ、神様とはそういうお方なのだということを言っていると思います。これは、私たちに対する神様の約束なのですね。この、神様からの約束に確信を持つことが出来る時、人は自分を飾ることも、強がることもなくなります。私とは誰か？—ただ神様に愛されている存在なのだ、と、ある意味堂々とその告白を言うことが出来るようにされるのだと思います。この詩編 23

編は、私は、**信仰者の「名刺」**代わりのようなものではないかと思いました。

[3] 私の名刺である「詩編 23 編」

ではこの**信仰者の名刺**には初めに何と書いてあるでしょうか？—「**主は羊飼**い」。これが信仰者である私たちの肩書です。それだけです。私には私の人生の真の保護者がいる、羊飼いなるお方ですと。この方によって私の人生は導かれ、護られていると。羊飼いがいて、羊がいる。両者は離れない。羊飼いは、羊に対して責任を負うのですね。その羊が羊泥棒や他の動物たちの襲撃から護られ、変な言い方ですが、羊の人生を喜んで安心して生きて行くことが出来るように、羊飼いは寝ずの番をして羊のことをいつも心に留めている。だから、「わたしには何も欠けることがない」と。

そして、「**主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。**」(2~3)。

美しい光景、牧歌的な平和な風景が目に浮かびます。けれども、実はパレスチナの地域は降水量が少なく、乾期の5~10月はほとんど雨が降らないそうです。羊飼いは、草や水のある場所を知っていて、季節によって羊たちが困らないように「正しく」移動させてくれます。その移動中、死海のほとりでは荒涼たる山や崖を通ることにもなるそうです。危険な「**死の陰の谷**」ですね。独り(一匹ですが)だったらそこに落ちたり、迷ったりしてしまふ。けれども、羊飼いが共にいて下さる。そして、「**あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける**」(23:4 後半)とあるように、羊飼いの、羊を導く道具である鞭と杖、これらによって、狼などからも護り、迷い出ようとするので背中を叩いたりする。羊は痛がってメエーって声を出すかもしれないけれども、それは虐めるためではなく、羊が大怪我をしないためです。3節にあったように主である羊飼いは、「**御名にふさわしく**」正しい道に導いて下さるのだ、とありますね。これは責任の主体は、**神様ご自身なのだ**と言っている訳です。「御名のゆえ」。だから羊は安心して委ねて行ける。

更に5節以下ですが、ここでは当時の**ベドウィンの生活**が反映されていると言われています。ベドウィンは、砂漠に**天幕**を張り、ラクダや山羊、羊を連れて遊牧する人々ですね。昔は旅人が盗賊に襲われることが多くありました。そのような時に旅人が近くのベドウィンの**天幕**に逃げ込むと、ベドウィンの一族は彼を友人として迎え、盗賊から護ってくれることがあったのですね。この23編の詩人も、神様がこの私を**友人**、或いは**ご自分のもの**として認め、敵から護って下さると言っているのです。しかもここで言われていることは、**望外の持て成し**です。—「**わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたし**

の頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢れさせてくださる」(23:5)。—高価な油を頭から注ぎ、葡萄酒を惜しみなく注いでくれる。まるで結婚式や戴冠式の祝いのように。

[4]「恵みと慈しみはいつもわたしを追う」

神様、どうして、ここまでして下さるのですか？と私たちが問う時、神様はただ一言仰ると思います。—「あなたはわたしの愛する子だから。わたしはそうしたいのだ」と。こんな愛に甘えていいのでしょうか？いいのです。なぜなら、それが私と神様の「正しい関係」ですから。

神さまは、私たちのために何を与えて下さったか。油どころではない、その独り子を、惜しみなく与えて下さったのです。それは、恩着せがましく、ということではありません。神様は、私たちを手離したくないのです。羊のように弱い私たちの命と生活の中に、神の命を注ぎ、神様が共に歩まれるためです。神様からご覧になれば、私たちは自己中心で頑固で、神様にそっぽを向き、自ら迷う道に入り込んで、それでもそれに気づかないで騒いでいる、そんな滑稽で悲しい姿に移っているのだと思います。ですから神様は私たちが元の場所に立ち帰るために、真の羊飼いであるイエス・キリストを送って下さったのですね。そして、十字架において、私たちの罪の重荷を身代わりに背負って下さいました。このお方は別名「インマヌエル」です。「神があなたといつも一緒だ」という意味ですね。

この詩編 23 編の最後の節、6 節です。「命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う」。—私たちが努力するのではなく、神様の恵みと慈しみが私たちを追いかけてくる、と言うのですね！これが、十字架と復活のイエス様の真実です。主のお約束です。私たちはそれに対して、ただこの詩人と共にこのように応えれば良いのですね。「主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう」。(23:6)。

この最後の言葉だけが、詩人の、主に対する応答です。「アーメン。あなたは本当にそのようなお方です。ですから、あなたの家（宮）に帰り、そこにとどまり、あなたをほめたたえながら生きて行きます」と。毎週の礼拝も、この詩編 23:6 の出来事だと思います。

さあ、この新しい週、イエス様のご愛を思い起こし、この詩編の言葉を心に刻みつけながら、ご一緒に歩んでまいりましょう。あなたの上に、真の羊飼いの祝福が豊かにありますように！

お祈り致します。